



です。そして、収入を得たらそれを支出しますね。支出すると、誰か他の人の雇用をうむわけですよ。結論から言って、完全雇用に近い状態になっていくんです。だから、競争があっても、結婚と同じなんです、労働市場というものは。」

—— 優しいとおっしゃっているのは、競争という現実を認めていくのがいいと

「それとうまく付き合っていくのがいい。競争を認めないということは、人びとの選択や自由を認めないということだから、様々な不合理が起こって、その不合理を解消するのにえらいことになる。そして、学校とは、社会に出て、どういうふうにして自分の能力を生かし、競争の社会に飛び込んでいくかの準備なんですね。学校には、生徒同士の競争はなくていいんです。ただし、将来社会に競争があるんだったら、いまのうちにその準備をしておこうと、こういう考え方でいいですよ。」

例えば、学校は皆仲間で、クラスは皆の違いを見つけないで、認めないで、一斉授業をしていきます、というふうなやり方をしたとしますね。でも、それは嘘なんです。中学から高校に、高校から大学に入学試験がありますね。その際に、クラスごと進学するのではなくて、一人ひとりが進学するのであって、一人ひとりに試験がありますでしょう。そうすると、仲間どころかバラバラになって、先程の原則はどこへやら、そこに競争が生じてしまいます。なぜ入り口の競争になるかというと、入学した後、そこには競争がないからなんです。学校が競争を回避するから、生徒一人ひとりに競争が強いられる。学校同士が競争すれば、生徒が競争する必要はない。いいと思う学校、行きたい学校に行けばいいんだから。そして行けるんだから。」

では、生徒と、教員と、どちらが厳しい競争に耐えるべきですか。教員はそれを職業に、現に社会を生きているのです。他の

職業と同じです。パン屋さんはパン屋さん、お医者さんはお医者さんと、みんな競争しているでしょう。では、教員は教員と、なぜ競争しないんでしょうね。」

—— 次に学校理事会（文部省の学校評議員制のさらに積極的な形態）の基本理念についてお聞かせ願えませんか？

### 学校理事会の役割

「教育には、これといって決まったやり方はありません。しかし、教育の成果、こういうことを人びとが身につけなければいけないのかについては、かなり幅広い合意がある。例えば、理科をわかって欲しい、国語をわかって欲しい、社会行動はきちんとできて欲しい、いろいろあります。ただ、それをどうやって身につけたらいいかという決まった方法論がなくて、ああだこうだと、いろいろなやり方の学校があるわけです。」

こんな状態だったら、むしろ多様なやり方を認めた方がいい。それには、現場の権限を大きくして、先生方の創意工夫や主体性にまかせた方がいい。それには、上からの統制——大した根拠もないのにこのやり方でやりなさい——とかはなしにして、官僚制をやめなくてはいけない。でも、学校のマネジメントは必要です。学校のマネジメントは校長先生の役目、誰か責任者がいなくてはならない。

だけど、それだけだと、校長先生が独裁者になってしまうかもしれないでしょう。誰が問題のある校長先生を辞めさせればいいのか。そこで、校長先生と違って実際に教育にあたる能力はないが、しかし、問題のある校長先生を見抜いて、辞めなさいと言う程度の社会的経験と見識はある、そういう人は教育のプロでなくてもいいのだから、いくらでもいるはず。官僚制でなく組織するのだったら、選挙で組織するしかないから、みんなでそういう人（学校理

事)を選ばばいいんです。

この学校理事に変な人がなったらどうするとか、心配したらきりが無い。学校理事が変だったら、次の選挙で落とすなり、リコールするなりすればいいんですから、やはり選挙で最終的に地域の人びとが責任を持つ。この選挙は『認定投票』に近いようなやり方にすると思います。もちろん、複数立候補で、定員よりたくさん立候補しなければ選挙になりません。しかし、AさんとBさんが足を引っ張り合うと、例えば、同じ民主的な考え方の人が3人出て、それからウルトラ右翼の人が1人出たとしても、民主的な票が3人で割れてしまつて、ウルトラ右翼がまっ先に当選してしまう。これは選挙として間違っているんです。そういうことが起こらないように、この人は大丈夫だという人にはみな、いくつでも○をつけることができるようにすると、考え方が似たもの同士が立候補しても、足の引っ張り合い、相打ちにならないんです。そして、落ちるのは、みんなが○をつけなかった、誰からも信頼されてない人。こういう人は絶対に当選しないんです。こういうまいやり方で選挙をすれば、もっとも信頼性の高い人から当選する。」

—— 先生は、保護者が責任をもって学校を選択し、選択した結果に対して責任を負うとお話をされています。それから、保護者の方でも、一方的に学校に子供を預けるのではなくて、学校を自らつくりあげていくことを考えていかなければならないと。その一つの集約された形として学校理事会がある、と理解してよろしいでしょうか。

「それでいいと思います。」

ただ、PTAとか生徒の親は、子供が卒業するとすぐ変わってしまう。学校が永続的であるのに比べて、すぐ変わってしまうから、近視眼的で無責任になりがちである。その声は十分に反映すべきだけれども、しかし、責任をとるほどの実体ではない。そ

う思うので、その声は反映されるべきだけれども、もう少し距離をおいて、学校を5年、10年という長い目でじーっと見ているタイプの人、こういう人が必要ということなんです。」

—— 先生がお書きになっている、「選択・責任・連帯の教育改革」というタイトルですけれど、選択・責任というのはよくわかります。そこで連帯という言葉について、もう少し具体的にお話し下さい。学校現場で、保護者や子供との対応に苦慮している中での、「連帯」。どのようにすれば保護者と教員とがうまく、これまでとは違った形の連帯が生み出せるか。そのことについてお話しただけならと思います。

### 保護者との連帯

「お互いに選びあった関係である、ということが第一ですね。」

結婚を例に取りましょう。結婚するカップルは、一緒に何かをする、協力してやる、そういう支え合いを念頭に置いている。お互いに選びあって、私はあなたと一緒にやりたいと思う、こうやって選んだからこそ、責任が生じるわけです。もし、自分の自由意思が介在してなければ、責任は生じないですよ。双方の自由意思が、それまでになかった人間関係を作り出しているわけです。ところで、親と教師はどうだろう。別に結婚するわけではありません。もっと限定的に、何かをやってもらいたいんです。教師は、生活を支えるために教育をしているという側面がある。だから、生活の糧というか、経済的な支援、コスト負担を、直接・間接に親に依存しているわけです。私立であれ国立であれ、形は違うけど、巡り巡って費用負担はそうなんです。そのことを背景に、親としては質のよい教育サービスを提供して欲しい。うちの子を何とか伸ばして欲しい。こういう個別の要求を持っています。そこで、お互いに、『あなたのお子さ

んを教育しましょう』『じゃあ、お願いします』という、いわば選び合いの関係があってよいんじゃないでしょうか。」

——なるほど。選択という結果があるがゆえの協力・連帯ということですね。

「そうです。学区制をなくすのも、そういう意味です。もうここの学校に行くしかない、この担任の先生に教わるしかない、というのが現状でしょう。そうすると、どうなるか。いい先生が担任になるようにおまじないをする親もいる。子供を人質に取られたからと、付け届けをしたり、蔭でグチグチ文句を言ったりする親も多い。それが子供に聞こえて教室で暴れたり、いろんなことが起こるんですよ。その根本は、意に添わない先生に教えてもらうしかないという制度の欠陥なんです。先生は同じでも、選べれば関係が違って来ます。」

——そうすると、選択・責任・連帯というのが、スーッとつながっていくわけですね。

「選び合うとどうなるかということ、お互いに努力するわけですよ。例えば、結婚には離婚がある。そうすると、努力を怠ってデレツとしていると、ある日離婚だなんてことになって来ますから、日々相手を選択し続けているということになるわけですよ。親と教員もいちど選択したら、もう終わりというわけではなくて、転校の自由もあるわけですから、選択し続けているからここに居つづけるという関係なわけですね。それは努力・向上・協力の結果です。これが連帯ということなんです。」

——養護学校には非常に障害の重い子供たちが在籍しています。なかにはこのため通学することができず、家庭を訪問して教育を行っている場合もあります。その子供たちの教育の考え方についてお話しください。

#### 訪問教育の貴さ

「障害の非常に重い人たちの場合も含め

て、教育の目標というか、教育のベースがあるとすれば、それは、人間としてのコミュニケーションができていくということだと思えるのです。相手を人間だと認めることが、すでにコミュニケーションの始まりであり、そしてコミュニケーションが成立しているということなのです。もし全く反応のない人がいたとしても、人間じゃなくて動物だったりしたら、それは全く話が違って来ます。例えばペットとかいろいろなものを飼っているでしょう。猫とか犬とか。彼らの知能がどれだけ知りませんが、少しでもなにか芸ができたりすると、それは喜びになる。予想しなかった、よくやったということになる。しかし、人間であるとする、人間としての期待を持ってしまえば、そうすると何をしても、それをプラスと見るかわりに、マイナス思考で、まだこれできない、あれもできない、これしかできないと見えて来ます。これが障害のつらいところですね。しかし、その相手を人間として見ている—だからこそ、そこに大きな障害があると見えるのですけれど—その視線、これが社会性の原点と思う。

そこで、人間のどういう能力が残っているのか、例えば、感覚が残っているのか、手を握り返すことができるのか。それは、犬や猫はやらないだろうし、やったとしても別のやり方になるだろう。人間だからできることがあるだろう。音楽を聴かせたら血圧が上がった、これだけだっているんですよ。何かの反応があって、それを受けてこちらもそれを受け取る。そこに人間としての交流がある。もし私がそこにいなかったら、彼は一人でいて、そういうコミュニケーションができなかったはずだ。そのコミュニケーションのチャンスを与える。チャンスをともに享受し、時間と空間をとるにして、彼に人間としての体験を一緒にする。これが、家庭を訪問して関わるこの意味だと思える。

家族にとっても、これは大きな救いになる。なぜかという、もし、誰も来なければ、全部家族がやらなければならないわけで、それを一生このまま続けていくという重い責任から下りられない。実際その訪問の間、時間的にも精神的にも解放されていくほかに、障害をもった子供が社会と少なくとも関わっている、という感覚もとても救いになっていると思う。どんなに障害の具合が重くても、なにかの反応があるからには、そこに人間的なコミュニケーションが成り立つのです。

そのコミュニケーションが“発達”していくということ、特に重視する必要はないと思うのです。例えば、昨日手を握ったら握り返した。今日手を握ったら握り返した。昨日よりうまくなったね、と教育者はつい言いたくなりますね。でも、昨日と同じでいい、と私は思う。

では、いったい誰が障害者に対して人間として関わるという努力をするだろうか。まず、親はするでしょう。兄弟はするでしょう。周りにいる人たちは、生活を支えていくためにそうします。でも、彼らは義務があるからやっている。人間としての信条からやっている。それが人間というものだからやっている。彼らしかやらなかったら、これは彼らもつらいだろう。本人もつらいだろう。そこで、家族でない人が、責任を持って社会から関わりにくる役割を分担する、これが教師というものではないでしょうか。

教師は、社会を代表してその場所に来ているのです。ですから、人間的なコミュニケーション—彼はなにができるのか、できることを探り当てて、そのできるチャンネルすべてを使って、最大限のコミュニケーションをする。これには、すごいスキルがいるかも知れません。忍耐もいるでしょうし、専門的職業もいるかもしれない。たぶん教育の極限かもしれないけれど、それが

教育というものではないかと思えます。

そのことを親にキチンと説明すれば、親は納得すると思います。親は希望を持って来ますので、逆に絶望しやすいのです。だけれど、無理に希望を持たなくてもいいのだというのが、希望ではないでしょうか。希望とは、発達しなければならぬとか、ついでの子と比べることから来たらされるので、人情ではあるんですけど。」

#### ヴィトゲンシュタインと障害児教育 ——コミュニケーションの根源的価値

「なぜ人間としてのコミュニケーションが教育の原点だと思ったかということ、それは大学を卒業する頃、読んだ哲学者の議論で、それ以来ずっとわたしに繰り返し影響を与えている議論、これからヒントを得たという側面もあります。それはヴィトゲンシュタインという現代哲学者なんですけれど、彼は、自分とは何だろうとか、他者とは何だろうとか、そういう古典的な、哲学的な問題を考えていて、それで最後に人間のコミュニケーションの問題に突き当たったんです。

人間のコミュニケーションを、彼は言語ゲーム (language game) と呼んでいる。例えば、言葉がもし喋れなかったら、お互い人間は人間であることを認めることができるのだろうか。こういう思考実験をしたんです。例えば、手があるじゃないか、右手を挙げたら、こういう意味。左手を挙げたら、こういう意味。言葉はこの二つしかないけれど、この二つだけでできている言語ゲームだってあってよいのではないかと。つまりね、人間というものの、条件をつき詰めていったんだと、私は思います。

人間は複雑なことをたくさんしています。ですから、それを全部人間だと考えていたら、一人一人違うから、いろいろこれが人間、あれが人間と考えてきりがない。そこで、つき詰めて、つき詰めて、本当に人

間の根本的な条件を考えていけば、どうなるんだろうかと考えたんでしょうね。もしそこに突き当たるなら、その条件を持っていさえすれば、大人も子どももユダヤ人もドイツ人もアメリカ人も、男性も女性も、ことによると宇宙人も、同じ仲間と考えることができるんです。それを一生懸命いろいろやったのです。

たとえば、人間が痛みを感じるということはどうやって確かめられるのか。わたしは歯が痛い。他人は歯が痛いと言っている。でも他人の痛みをわたしは分からない。じゃあ、わたしは他人の痛みをどうやって信じるのか。こういうことをずっと考えていくんですね。彼の結論は、普通の意味では他人の痛みは分かるわけがない。自分の痛みは疑うわけにはいかない。だけど、あなたもわたしも同じ痛みを持っていると信じる。ここが大切なんですけど、このことによって人間というものができあがるんですけど、なぜ可能かという、歯が痛いときにはこうやったり、痛いと言ったり、何かそういう振る舞いがある。それを見よう見まねで共有していく。これは文化なんですけど、文化があるおかげで、痛みのような本来伝えられないものが伝わる。これが、感覚と言葉に関する言語ゲーム。

これは、障害の場合に通じるんじゃないかと思うんですよ。

相手に意識があるかどうか、感情があるかどうか、相手がわたしと同じようなことを感じる力があるかどうか、常に疑問ですね。常に疑問だけど、なにかの解決を与えないと、関われないでしょう。その関わるときの原理、いろんな教育理論があると思うけど、わたしはこの言語ゲームの原理が非常に強力だと思う。それは、どんな極限的な条件でも、人間と人間のコミュニケーションを信じて、お互いがやりとりをしようという覚悟を示していると思う。私はそう読みました。彼の主著は『哲学探究』と

いう本なんです。読み解こうという心があれば、必ず応えてくれる本だと思う。障害児教育に関わる専門家が、何人かでも読み、そこからヒントをつかみ、新しい解釈を生み出されたなら、大きなインパクトになると思います。読んでアイデアの価値が分かる人は、そう多くはないかもしれないけど、そういう現場におられる人びとは、悩みが深ければ深いだけ、そこから触発される、読み抜く力も強いんじゃないでしょうか。そうした試みが、翻って教育学だけではなく、哲学あるいは社会学にもインパクトを与えるかもしれない。そう期待したいと思う。」

—— 最後になりますが、この本の中で書かれている事柄というのは、戦後の民主主義の完成とか総決算とおっしゃっているのですが、そのことについてお話しください。

#### 民主主義と教育

「民主主義とはなにか。それはふつうの人びとがこの社会の主人公だということでしょう。普通、政治的國家の主人公だということですけど、社会の仕組みや作り方、それを法律を作るという形で国会で実現していくのですけれども、自分たちが自分の主人公ということ。それには大きな責任も伴いますが、また、自由の喜びがあり、そして誇りもあるわけです。

で、そのために教育の場ではどういうことが行われればいいのか。それは、私たちが社会を作り出す主人公なのだ、そのための責任を引き受けなければならないけれど、それは自分たちの誇りであり能力であるということ、十分、社会に育つ前の若い人びとが身につける、信じるということのほずです。

ところが、これまでは、教育は手段であり、知識も手段であり、自分の人生は学校の中ではなくて、社会のどこかにあると考えられ、学校と社会が切り離されていた。

だからこれを一つの全体として取り戻し、そして、学校の意味づけを十分生徒も分かり、そのためのコストを負担するということまでし、そして教員や親と協力して社会のメンバーになっていくという大事な時期を過ごしていく。これが民主主義的教育でなくてなんでしょうか。

今までの学校教育は、平等な学校という理念を振り回して、実態は受験競争だったり、親は子どものためと言いながら、実際には過剰な期待を寄せて、子どもを潰して

しまったり、いろいろな副作用ばかりだったでしょう。そうじゃなくて、その教育の当事者である子どもや、教員や、親のよい願いに、もっと大きな場所と、正しい相互関係を与えて、民主主義を確かなものにする。こういう制度改革にこそ、民主主義社会の完成があると思ったわけです。」

—— 本日は、明日アメリカに発たれる際に、たいへんスリリングなお話を伺い、本当にありがとうございました。



#### お詫びとお知らせ

創刊第2号に掲載しました橋爪大三郎教授へのインタビュー記事「わたしたちが考える21世紀の教育改革 — その2 —」は事務局の手違いで、著者の校正を経ない原稿が掲載されました。著者と読者諸氏に心よりお詫びいたします。著者校正の原稿は、IEP日本のホームページに掲載いたしました。よろしくお願ひいたします。